

“Think globally, act locally” — 「グローバル」なプライマリ・ケアをめざして

水野泰孝

グローバルヘルスケアクリニック院長

大学院で熱帯医学講座に所属してから、大「グローバルヘルス (global health)」と呼ばれる学問領域での研究を始めた。小児科医で感染症に関心があったことから、開発途上国における子どもたちの健康問題のひとつである低栄養と感染症の関連性について多くの論文を検索し、「熱帯感染症とビタミンA欠乏症との関連性」を主たる研究テーマとした。

とは言え、国内では机上の空論であったところ、在学中に国際厚生事業団の研修でバングラデシュの研究施設を訪問した際に、栄養障害として代表的な「マラスムス」や「クワシオルコール」の子どもたちと対面したことは大きなインパクトであった(写真)。

日本では、ネグレクトなどでもない限りは栄養障害である子どもたちはいないだろうと考えていたが、その後の研究成果で気管支喘息の小児においてビタミンAが低値であることが判明した¹⁾。最近では、日本人の多くがビタミンD不足であるという大規模な疫学調査も行われており、様々な疾患との関連性が示唆されている²⁾。

上記は一例にすぎないが、様々な視点から見れば国内でも「グローバルヘルス」に関連する課題が至るところに見受けられる。このような背景をふまえ、国家やアカデミアレベルだけではなく、プライマリ・ケア領域においても地球規模の

視野で考え (think globally)、地域で行動する (act locally) ことが求められるのではないかと考え、「グローバルヘルス」を必要とする人たちを「ケア」することをコンセプトとしたクリニックを2019年に設立した。

大学などとは異なり、大規模な研究や調査を行うことは困難ではあるものの、海外渡航者の健康管理、帰国後の感染症診療、在留外国人の診療など、現地に赴かなくても「グローバルヘルス」を必要とする人たちが身近にこれほどまで多く存在することに驚いた。微力ながらこれまでの経験や知見の成果を地域医療に還元できていることに、大きなやりがいを感じているところである。

【文献】

- 1) Mizuno Y, et al: *Pediatr Int.* 2006;48(3):261-4.
- 2) Miyamoto H, et al: *J Nutr.* 2023;153(4):1253-64.

